

柞乃杜

秩父神社社報
柞乃杜(ははそのもり)

第 62 号
(大 祭)

令和 2 年12月3日



火も水も

ときには怒り

また和み

人に添ひゆく

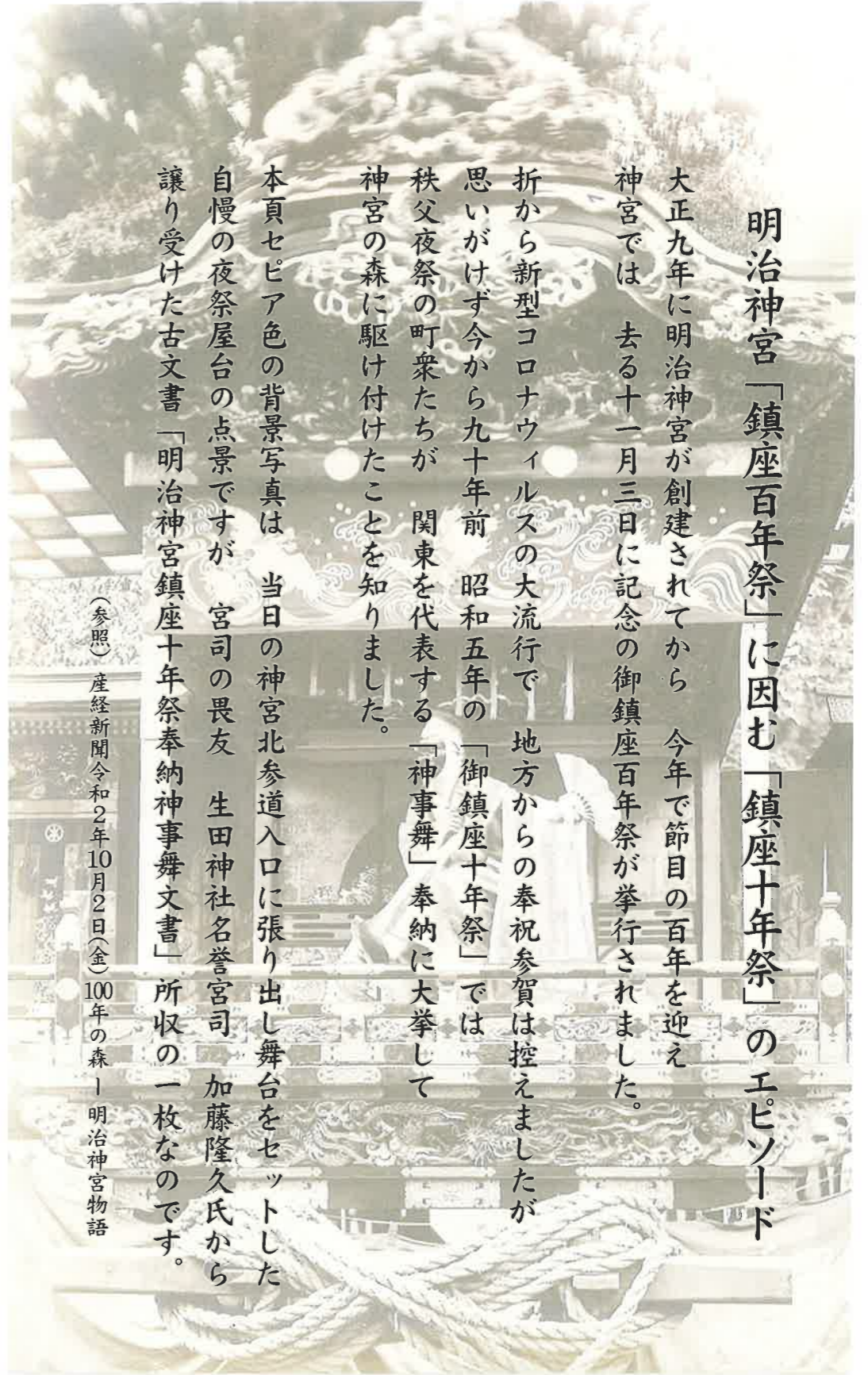
神とこそ知れ

明治神宮「鎮座百年祭」に因む「鎮座十年祭」のエピソード

大正九年に明治神宮が創建されてから 今年で節目の百年を迎え
 神宮では 去る十一月三日に記念の御鎮座百年祭が挙行されました。
 折から新型コロナウイルスの大流行で 地方からの奉祝参賀は控えましたが
 思いがけず今から九十年前 昭和五年の「御鎮座十年祭」では
 秩父夜祭の町衆たちが 関東を代表する「神事舞」奉納に大挙して
 神宮の森に駆け付けたことを知りました。

本頁セピア色の背景写真は 当日の神宮北参道入口に張り出し舞台をセツトした
 自慢の夜祭屋台の点景ですが 宮司の畏友 生田神社名誉宮司 加藤隆久氏から
 譲り受けた古文書「明治神宮鎮座十年祭奉納神事舞文書」所収の一枚なのです。

(参照) 産経新聞令和2年10月2日(金) 100年の森―明治神宮物語



解説 秩父神社(60)

杉山 正司

◆ 秩父神社を巡る

三口の刀剣と武蔵武士(五)

御物太刀から四年後、ほぼ同文の
 銘文を持つ太刀が作られた。

国宝太刀 景光・景政

銘表

廣峯山御劔願主武蔵國
 秩父郡住大河原左衛門

尉丹治時基於播磨國完
 栗郡三方西造進之

裏

作者備前國長船住左衛
 門尉景光作者進士三郎

景政

嘉曆二年己巳七月日

法量

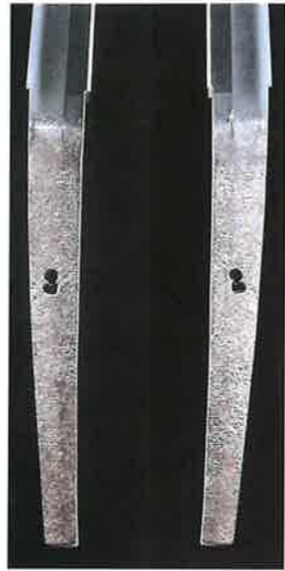
長さ八二・七センチメートル

反り

二・六センチメートル

鎬造、庵棟、鍛えは小板目で乱れ
 映り淡く立つ。刃文は直刃調で互の
 目(こころ)に小乱れが交じる。

銘文から、作者は御物太刀と同じ
 く備前國長船派の景光と景政の合作
 で、嘉曆四年(一一三二)に実栗郡三



美の匠 特別展「美の匠 原中国の開祖とされる素戔嗚尊を御祭神として祀り、同社では農耕・生産に御神徳があるとしている。社伝では、三韓征伐の途次に神功皇后が戦勝祈願を行ったとされ、武神としての信仰も篤く、神仏習合における素戔嗚尊の本地仏・牛頭天王総本宮とも称する神社である。

方西で作刀されたことがわかる。

裏銘には、御物太刀にはなかつた「作者」が進士三郎景政に付されている。「進士」は合格者という意味から、景光監修のもと弟子と目される景政主体で鍛刀されたとみられる。作風も華やかな御物太刀に比べて、穏やかな出来であることから首肯される。

また表銘からは、播磨國姫路城の真北の広峰山に鎮座する廣峯神社に奉納されたことがわかる。さらに御物太刀銘にあった沙弥藏蓮の名が無いことから、この間に亡くなったと推測される。

大河原氏の祈りと願い

再び太刀を作刀して、廣峯神社へ奉納した理由は何だろうか。

廣峯神社は、葦原中国の開祖とされる素戔嗚尊を御祭神として祀り、同社では農耕・生産に御神徳があるとしている。社伝では、三韓征伐の途次に神功皇后が戦勝祈願を行ったとされ、武神としての信仰も篤く、神仏習合における素戔嗚尊の本地仏・牛頭天王総本宮とも称する神社である。

播磨國三方西に移住後も、「武蔵國秩父郡住」と銘に刻んだ大河原時基。その理由は、前の二口の刀剣同様に本貫地の秩父を遥か播磨から思う武蔵武士の心を表すとともに、新領地での日々の生活と生産の安定、さらに武運を、同国の廣峯神社に祈りと願いを込めて奉納したのである。

国宝短刀、御物太刀、国宝太刀の三口は、景光、七年間の作刀期間、大河原氏、秩父神社と廣峯神社への奉納というキーワードが浮かび、まさに兄弟刀といえるだろう。

廣峯神社からの太刀の行方

国宝太刀も、何時廣峯神社を離れたか定かではない。戦国時代姫路城は、黒田官兵衛孝高が中国攻略途上にあつた羽柴秀吉に献上し



廣峯神社の社伝では、官兵衛は廣峯神社とも縁がある、と推測の域を出ないが、官兵衛を通じて秀吉、

そして徳川家康へと伝えられた可能性がある。

国宝太刀が歴史上に登場するのは、寛文三年(一六六三)四月十五日、宇都宮城主であった奥平美作守忠昌(祖母は家康の長女が、四代将軍徳川家綱の日光社参の折に拝領「徳川実紀」・「寛政重修諸家譜」)その後同家に長く伝わった。昭和二十九年に国宝に指定、現在は埼玉県立歴史と民俗の博物館に収蔵されている。

国宝太刀は、秩父神社ゆかりの国宝短刀(謙信景光)とともに、令和三年一月三十日(土)から三月七日(日)まで、埼玉県立歴史と民俗の博物館で公開される。この機会に、是非、御高覧いただきたい。(埼玉県立歴史と民俗の博物館主任専門員兼学芸員)



「神事」と「祭礼」と —ウィズ・コロナ時代のコミュニティ文化

宮司 蘭 田 稔

令和の御代替わり、というわが国ならではの時代感覚の蘇えりに、敢えて挑戦するかのように新型コロナウイルスの跳梁が勢いを増して、今や国を挙げて多面的にコロナとの共生が問われる状況に立ち至ったように思えます。

つい先日(十一月八日)には、令和御大典の完結を成す秋篠宮文仁親王殿下の立皇嗣の礼が無事盛大に挙行されて、ひとまず新時代の継承が確保されたところですが、他方ではコロナ流行が大都市圏の第二波から全国の地方圏に波及する第三波に拡大して、いよいよ地方のコミュニティ存続を支えてきた祭礼文化そのものを揺るがせかねない事態を迎えるに至ったところです。

た例えば、当社現行の年間祭祀に深く関連する貴重な近世地方文書に、宝永六年(一七〇九)の「秩父領百姓年中業覚」という名の、当時の町方役人(名主・割役)が地元代官所に提出した年間の生業・生活暦があります。

すべて興味深い内容ですが、特に本稿に関連しての項目では、まず正月二十日より二月三日まで「妙見神事」とあり、また秋十月二十日より十一月三日まで「妙見神事二月之通二御座候」とあって、その春秋両度の十余日間を渉る「神事」

との組み合わせが、特に近代の「秩父夜祭」に継承発展して、今日の秩父地域一帯のコミュニティ活性化に寄与する郷土文化に、今後ともあり続けることができるとすれば、今回の新型コロナウイルス感染という切迫した未知のハードルを如何に乗り越えるかが問われることとなります。

まずは新登場の感染力した、かのウイルスの挑戦に対して、未だ人類が抵抗力となるワクチンや治療薬を開発できていない今の段階では、もっぱら消極的に飛沫感染をもたらす三密防止の対策に頼るのみ、したがって「祭礼」の賑わい場面を自粛せざるを得ない今回の例祭となります。

ただし肝心の「妙見神事」に当たる一連の神社祭祀については、



「新装成った御本殿東面」

の具体的内容は、「秩父郡之内」では「竹木伐不申候 普請鳴物等尤田畑江鍬入不仕候」「女者絹木綿之業相止候 男者くつわらじ縄むしろ等仕度候」とある、要するに、当時は旧暦の二月三日、今では新暦の四月四日の田植祭神事、また旧暦の霜月(十一月)三日、今の新暦十二月三日の夜祭(神幸祭)を迎えての郡内全住民に及ぶ物忌み精進を指している言葉でした。ここで敢えて申し添えるべきは、少なくとも近世には「秩父大宮妙見宮」と崇められた当社の「妙見神事」といえば、地元領民が等しく十余日間のおコモリで心身を清めての神マツリであったということです。

因みに古典祭祀でいえば、当初の十日余りは「散齋」、最後の祭日は「致齋」ともなりましょう。ともかく神道の神祭りは、「生まれ清まり」が第一なのです。

もう一つこの文書に注目される言葉に「妙見祭礼」という表現があります。特に二月の条目に、年間に男たちが「遊ぶ」機会に「月に六日之市手間」つまり六斎市の日と「其外年中二三日妙見祭礼」そのほか年中行事などで「四五日宛遊申候」とあって、要するに、六月十五日の「妙見川瀬祭」と八月二十三日の「妙見祭礼」と、十一月三日より六日まで「妙見祭礼二而国々商人入込候 売買仕候」と記しているのが、要はひと口に「神賑わい」とも「付け祭り」とも言い慣わす「妙見祭礼」の遊ぶ内容ではなかったか。

さてこのように、改めて近世秩父の先人たちが例年親しんできた「妙見神事」と「妙見祭礼」

前回の社報61号の論説でも言及しておきましたが、今回の新型コロナウイルスを当初は見えない敵と身構えたにしても、彼らは地球上の豊かな自然の中に30億年も昔から生物に寄生してきた微生物の仲間ですから、わずかに二百万年から七百万年のあいだに登場した人類のゲノムにも既に相当のコロナ遺伝子が組み込まれて免疫力となっているはずですが、来年の今ごろは十分なワクチン対策が施されて、「三密」を恐れずに秩父夜祭の「神事」と「祭礼」を執行できることを祈ります。

綾部光芳様の歌集『清韻』より掲載させて頂きました。綾部様はこの歌について「古代に於いて、火は、火之夜藝速男神(迎具土神)、水は、彌都波能賣神とも呼ばれ、人々に敬われていたという。火も水も、人類が生まれる前から存在し、火は暖房や照明や煮炊きなど、人々にとって大切な存在であったが、時には、火は森林火災や火山噴火。水は洪水や津波などの災害をもたらした。水は小惑星や他の天体の隕石からもたらされた、と言われていたが、有機物などが地球以外の天体から降臨したのだと思うと、生命の存在の不思議さを思わずにいられない。古代に於いて、人知の及ばぬものは神の行為である、と理解されていたようだが、生命に必要な水の存在は、神によってもたらされた、としか思われたいし、火もまた同じだと思わずにはいられないのである。」とのご説明を頂きました。今後益々のご活躍をお祈り申し上げます。

【表紙絵解説】

この度の表紙は、修理復元が終わりました御社殿東面より当社東北(表鬼門)を守護する「つなぎの龍」と致しました。名工左甚五郎作と伝わり、昔々この近くの天が池に住み着く龍が暴れるとこの彫刻の下に水たまりが出来ていたそうです。そこでこの彫刻に鎖を掛けたところ龍は出現しなくなると言われております。

【表紙歌解説】

火も水も ときには怒り また和み
人に添ひゆく 神とこそ知れ

今回の短歌は響短歌会主宰・埼玉県歌人会理事・現代歌人協会会員の

御社殿保存修理工事進捗状況

設計監理 ㈱文化財工学研究所
はじめに

現在進行中の秩父神社御社殿修理工事は、社殿外部の彩色（建物に直接描かれた地紋及び彫刻）や飾り金物の修復を主とした修理工事であり、令和元年度から令和5年度までの5カ年度をかけた長期に渉る文化財修理工事になります。
修理は建物の東面、西面、正面及び背面と順に行う予定であり、今回は東面の修理が完了いたしましたのでご報告させていただきます。



つなぎの龍と組物

◆ 昭和42年の彩色修理について
修理前の社殿の彩色は、昭和42年の修理工事で塗り直されたものです。一つ一つの彫刻彩色は丁寧に描かれていますが、部分的に光の表現（金箔・金泥）が過剰であったり、使用されている顔料（色味）が多様で彫刻ごとに異なっていたりと、社殿全体での統一性に欠けています。また、一部古建築の定石と異なる彩色や、西洋的な表現で描かれた部分が見受けられることから、当時の彩色修理には様々な方が携わったものと思われる。昭和42年の修理直前の古写真が残されており、特筆すべき彩色の剥落が甚だしく、彩色の復元には困難を極めたであろうことが伺えます。

◆ 今回の彩色修理について
基本的に現状踏襲とし、修理前と同様の配色で塗り直しを行っておりますが、全体的に顔料（色味）を統一し、表現が過剰になりすぎないように注意を払いました。また、伝統的技法と異なる部分が確認された場合は、類例に倣った修復としています。
なお、塗膜の下層より旧彩色の痕跡が確認された場合及び古写真から復元が可能な部分については、昭和42年修理以前の姿として復元しました。

修理前と変わった主な部分について、以下にご説明いたします。
（鸞）
拝殿上部の板壁には、鳥・大和松・梅の彫刻が配されており、修理前の鳥の彫刻は全体に青色（群青）の彩色が施されていたことか



鸞（修理前）



鸞（修理後）



雷神（修理前）



雷神（修理後）



兎（修理前）



兎（修理後）

ら、山鵲と考えられていました。ただし、彫刻には山鵲の特徴である尾羽の丸みがなく、丸い模様も表現されていません。一方、冠や翼羽がみられ、これは鸞の特徴であることから、今回は山鵲ではなく、鸞として彩色を施しました。

梟だより



（鎮座二〇〇年奉祝事業）
奉賛者御芳名簿(8)

- 神社扱い
十万円 阪本 是丸
一万円 高橋 健一・吉田 宗平



◆ 宮前洋一大総代
敬神功労章有功章表彰
神社本庁では、毎年二月、三月と九月に神社役員、総代、氏

◆ 奉納菊花展開催報告



◆ 奉納報告
新型コロナウイルス感染症により各種の催し物が自粛、中止になる中、秩父市菊花愛好会による恒例の菊花展は今年度も無事開催し、約二百点の艶やかな菊花が奉納され、錦秋の境内を彩りました。
昭和二十九年に始まり今年で六十七回を数えます。改めて関係者の皆様のご努力に敬意を表し、御礼を申し上げます。



◆ 柞乃杜神前結婚式報告
秩父市山田 前原悠志・知里様
末永く幸せな家庭をお築きできますようお祈り致します。

◆ 秩父神社妙見講
ご奉納がありましたのでご報告いたします。

- 自 令和 二年 九月 至 令和 二年 十一月
- 九月五日 荒川妙見講
- 九月六日 中村講
- 九月六日 岩田雄一講元外百九十六名 小鹿野講
- 九月十三日 高橋良衛講元外六十四名 上町講
- 九月十三日 浜中啓一講元
- 十月四日 大久保哲男副講元代表参拝 上宮地講
- 十月四日 大島耕造講元外百四十四名
- 十月十八日 中町講
- 十月十八日 久保忠太郎講元外百十二名
- 十月二十三日 東町妙見講
- 十月二十三日 福井直壽講元外八十六名
- 十月二十四日 桜木講
- 十一月七日 濱田雄司講元外三十一名 今井明講元外八十八名 番場妙見講
- 十一月十一日 野坂講
- 浅見伊久雄講元外百二十七名

〈雷神〉

幣殿北側上部の板壁には、雷神と雲が配されており、修理前の雷神の胴体は全体に赤色（朱）の彩色が施されていましたが、塗膜を掻き落とすところ、下層に黄緑色（白緑）の塗膜が確認されたことから、今回の修理では元来の彩色であった白緑で塗り直しました。

一般的には赤鬼のイメージが強いですが、例えば寛文年間に描かれた俵屋宗達の『風神雷神図屏風』では雷神を白色、風神を緑色で描いており、必ずしも赤色であったわけではありません。

◆ おわりに
つなぎの龍の下の北側の琵琶板には、茶色の兎と白い兎の2羽の兎の彫刻が配されておりました。しかし、塗膜を掻き落とすところ、茶色の下層には白色の塗膜が確認されたことから、今回修理では2羽とも白兎として塗り直しました。

現在西面の修理に移行しており、西面は令和3年度中の完了を予定しております。そのため西面は足場で覆われてしまっておりますが、少しずつ御社殿が鮮やかな彩色と飾り金物で彩られた姿に変わっていく過程を見守っていただけますよう、よろしくお願ひ申し上げます。



◆「秩父郡の歌」
お披露目会について

当社に事務局を置く秩父宮会では、令和改元を記念して昭和天皇様の御即位御大典、また秩父宮両殿下のご成婚を奉祝して昭和三年に制作された「秩父郡の歌」を復刻し、CD化して秩父市をはじめ秩父郡内の各自治体に寄贈すると共に、そのお披露目を秩父宮妃殿下の誕生日にあたる九月九日に平成殿に於いて開催致しました。

当日はソプラノ・ソロを担当した藺田真木子さんとピアノ伴奏の鈴木啓三さんの生演奏のもと、久喜邦康秩父市長様ほか凡そ五十名の聴衆が集まりました。



今回、「秩父郡の歌」の復刻にあたっては、原曲に忠実であることを前提に制作当初の資料を求めたところ、幸いにも信時氏の愛娘である熊谷はる子さんの紹介により自筆による譜面の写しを手し、この原譜を頼りにピアノ伴奏と混声四部合唱の編曲を行い、録音作業を進めました。

信時潔は昭和前期を代表する作曲家であり、作詞者の佐佐木信綱は歌会始撰者として皇族に和歌の進講を行った歌人としても知られています。当代一流の芸術家の手により、武甲山をはじめとする秩父山塊と荒川の清流、秩父銘仙や林業など当時の地場産業を歌詞に織り込み、合せて秩父宮殿下を顕彰する内容に仕上がっています。

秩父宮家をご創建された大正十一年より令和四(二〇二二)年で百年の節目を迎えます。晴れてコロナ感染症終息後には、皆が心一つにして歌うことができる郷土の歌として、多くの皆様に覚え

て頂きたいと思えます。

※秩父宮会HPより無料ダウンロード可。

新型コロナウイルス感染症 拡大防止対策実箇中



ご理解・ご協力のほどよろしくお願い致します。

秩父神社社務所

◆令和2年例大祭神事について

新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、本年の例大祭諸神事は左記の通り行います。

十二月一日 御本殿御清浄之儀 通常齋行
十二月二日 御神馬奉納之儀 規模縮小にて齋行
十二月三日 新穀奉獻祭 通常齋行
諏訪渡神事 規模縮小にて齋行
勸幣使参向例大祭祭典 のみにて齋行
御神幸祭 神職・神楽師・一部関係者

のみにて齋行

神輿の奉担並びに山車の供奉は自肅
十二月四日 蚕糸祭 規模縮小にて齋行
十二月五日 産業振興・交通安全祈願祭 規模縮小にて齋行
十二月六日 新穀奉獻感謝祭 併例大祭完遂奉告祭 規模縮小にて齋行

編集後記

ここに社報柞乃杜第六十二号をお届けいたします。

■凡そ一年間に亘る御社殿東面修理工事が完了し、つなぎの龍を始めたとする彫刻群も色鮮やかに再生されました。一日も早くコロナ禍が終息し、多くのご参拝の皆様が目にして頂ける事を心待ちにしております。

※ 本報の用紙は再生マット紙を使用しています。

令和二年(二〇二〇)十二月三日

編集 秩父神社社務所
発行 秩父神社社務所
〒361-0004 埼玉県秩父市番場町一三
TEL (0494) 221-0262
FAX (0494) 241-5596
印刷所 有限会社 坂文社印刷所
〒361-0004 秩父市東町二七七八